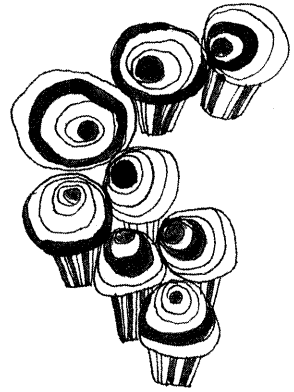


アトランタ便り



はるにれの会
入江 礼子

(サンダーstormの日)

その日、四月九日は、朝からバケツをひっくり返したようなドシャ降りと日本の梅雨明け前のような激しい雷鳴にみまわれていました。渡米後一週間が経ち、その日から、三人の子ども達はアメリカンスクールに通うことになったのです。朝七時十五分、といっても既にサマータイムになっていたので、実際の時間は六時十五分、日本では信じられない程の早朝に、私たちは学校へ向けて出発しました。

最初に、長女の行くハドルストンエレメンタリースクール(小四〜小六までの学校)へ行き、次に長男と次女の行くオークグローブエレメンタリースクール(幼稚園〜小三)に行きました。両校とも驚く程手続きが簡単ですぐに担任の先生が決まり、(我が家の場合、前もってアポイントメントを取っていませんでしたが、それも)子ども達は三人共、満面に笑みをたたえた先生に支えられてそれぞれ教室に消えて行きました。私達夫婦が出来たことは、子どもについて面談の時を持って欲しい

という申し入れを、その短かい時間に済ませることだけでした。子ども達がいなくなった後、私達はオフィスで帰りのスクールバスの番号と時間を確認させられ、初日も帰りはスクールバスで帰るので心配しないように言われました。

子ども達には日本で全く英語の準備をさせていなかったので、恐らく何もわからないはず。そういう子ども達を先生方は、サッと受け取ってくださいったわけです。私は、ただただあつけにとられてしまいました。

夫はそのまま出勤し、当時はまだ車が一台しかなかったもので、私は家まで送ってもらってから、二時四十五分まで一人で家で過ごすこととなりました。

お昼近くになると、朝のサンダーストームが嘘のようにカラリと晴れ上がり、その暑さはほとんど夏の暑さでした。特に春の嵐は長時間続かず、一日のうちで大雨と晴天があるのはこの地では当り前なのです。

朝の学校のことといい、お天気のことといい、随分違う風土なのだなあと思わずにはいられませんでした。

いよいよ午後二時四十五分。きっかりに家の前に黄色いスクールバスが止まりました。私は五分くらい前から今か今かと庭をウロウロしていたのです。まず長男が降りてニコッとし、続いて次女が降りてニコッとすると思いきや、突然大声でワーンと泣き出し、しばらくの間は私に抱きついて泣きじゃくり続けました。

「あーよかった。僕達家を間違えないで……。どこで降りるのか先生はバスの運転手さん（ほとんど女の人）に言ってくれたみたいなんですけど、僕本当に着くかどうか心配だったんだ。ズーっと外の景色をにらんでいたんだけど、なかなか知ってる景色にならないし……。でも、この間お散歩に行っておいてよかったよ。ラクスパーク・ターン（我が家の区域）に入ったら近いなってわかったから……。あーよかった。」（長男 小三）

「ワーン、ワーン……。」（次女）

家の中に入ってもしばらく泣き続けていた次女でしたが、やがて一言二言言葉を言うようになりました。

「どうして泣いちゃったの？」（私）

「だってーだってー、みんなアメリカ語なんだもん！アメリカ語しかしゃべってないんだもん。」（次女）

十五分すると長女も帰って来ました。

「うん、先生がやさしくてよかった。一番前の席に坐らせてもらえることになったから、ちょっぴり安心したの。」（長女 小五）

さあ、明日から大変！というのが、その日の偽らざる私の気持ちでした。そして、予想通り、いえ予想以上に精神的に苛酷な日々の火ぶたが切って落とされたのでした。

（ランチじゃなくて、お弁当にして！）

子ども達の学校では、お昼はランチルームでランチを食べることになっています。といっても日本の学校のように全員が給食でなければならないというのではなく、お弁当を持ってきたければそうしてもよいのです。学校のランチを食べる時だけ一回分として九十セント払えばよいというわけです。（ちなみに朝食が諸々の事情で食

べられなかった子には朝食（もちろんお金を払うのです）があります。私は、日本の習慣通り迷わずに学校のランチを子ども達に食べさせることに決めました。

そして次の日、帰りのスクールバスから降りた次女は、又思い出したように泣きはじめました。それでも、こころもち、昨日よりは泣く量が少なくなっていたのです。やがて落ち着いた彼女は、「エイマス先生からお手紙があるの。」といって、私に先生からのメモを出してきました。それによると、今日のランチメニューで、次女が食べたものはフルーツだけだったというのです。それはおかわりをしたらしいのですが、他のメニューには、一切、手をつけなかったと書いてありました。そして、コメントとして、しばらくこちらの食事慣れるまで「プリングランチ」つまりお弁当を持って来た方が彼女が安心するのではないかと書かれてありました。なるほど、言われてみればその通りで、家での食事内容は日本にいた時とほとんど変わっていないのですから、舌にまだ馴んでいない食べものを、ただでさえ不安な学校で

食べられないのも道理なわけです。私は、さっそくその指示に従って次の日からはお弁当にすることにしました。そしてあくる日、次女は又お手紙を持たされて帰ってきました。それによると、今日は学校でもほとんど泣かなかったので、特に心配がなければ、このまま様子をみたらどうかと書かれていました。けれども私は、どうしても一度学校に見に来てくれという彼女の願いもあつたので、一度、学校の次女の幼稚園クラスを見学することにしました。

(幼稚園で)

子ども達が学校に行きはじめて五日目、金曜日に、私は一日次女の幼稚園クラスを見学してきました。その前にちよっぴり、私達が住んでいる場所と、この地域の学校について説明させて頂こうと思います。

とにかくアメリカは広い国です。夏休みに隣りの州であるフロリダ州にあるディズニワールドへ行った時も、延々と続く高速道路を見て、何度、このままこの自

動車が飛行機になって早く目的地へついてくれないかと思つたことでしょう。八時間の片道の道のりでやっと隣りの州なのです。かように広いアメリカのことゆえ、私達の体験は、丁度盲目の人が、象のことを説明するのに、ある人は鼻だけをさわってそれが象のすべだと思ひ、又ある人は足だけをさわってそれが象だと思つたのと同じ間違いを私自身もしかねません。そこで、ここで私が見学してきた幼稚園を取りまく社会的な環境についてちよっつとお話しておこうと思います。

☆ジョージア州ピーチツリー市

私達が住んでいるのは、アメリカ東南部に位置しているジョージア州の州都であるアトランタ市の南西四十マイル(約六十キロ)のところにあるピーチツリー市という小さな町です。人口は現在約一万六千人の計画都市で、町の雰囲気は、日本の蓼科を平地にしたような自然に恵まれた環境の良い町です。ここは市が率先して工業誘致をしていることもあって、ここ二三年は、日本企

業の進出も目ざましく、TDK・横河電機・ナショナル

パナソニック・星崎電機・川崎ローダー・ヤマハ・古河

電工などが工場やオフィスをかまえています。ですから

アメリカの郊外の町としては、日本人が多いのが特徴で

す。幼稚園から高校二年生までで約八十六名おり、まだ

まだ増える気配です。家族や、その他の赴任者を入れれ

ば二百名を越す日本人が一つの小さな町に集中している

ことになりました。これはニューヨーク近郊やロスアンゼ

ルス近郊を除けば、南部としては、一番日本人のいる割

合の高い町ではないかと思われれます。何故日本人がこん

なに集中しているのでしょうか。理由は二つ挙げることに

が出来ます。一つには、市自体が、工業誘致を積極的に

やっていることが挙げられます。又、もう一つの要素

は、ここビーチツリー市の属しているカウンティ（郡）

が、ジョージアの中で一番レベルが高いことが挙げられ

ます。日本人はどうしても、安全度が高く、教育環境が

良い所に好んで住みたがる傾向があるので、この近くに

工場を持っている会社の方々も、住むのはこの町にして

いる場合が多いのです。

☆教育環境

アメリカでは、カリフォルニアアチーブメントテスト

（略称CAT）というのがあってそれで全米の州のラン

ク付けが発表になるのですが、ここジョージア州は、残

念ながら、後ろから数えた方が早い場所に位置していま

す。けれども（まあ、かといって五十歩百歩なのです

が）その中でファイエットカウンティは一番成績が良い

ことになっています。カウンティ自体も教育熱心で、教

育熱心ということは、それだけ教育にお金を使えるだけ

の豊かさがあることを意味しています。教育後進州のせ

いか、或いは、ここファイエットだけに限られるのか、

今の私にはその判断材料がないのですが、ともかく、ピ

ーチツリー市の次女の通っているオークグロブエレメ

ンタリースクールは、やはりとても教育熱心で、なんと

幼稚園からしっかり勉強しているのです。日本の小学校

と同じような内容をしっかりやっているわけです。その

理由の一つとして、先程述べたCATがあることが挙げられます。このテストは、幼稚園の終わりの時点にあって、ある点数に達していないと、一年生に進級できないのです。これには私もびっくりしてしまいました。何で一年生に上がる前にテストがあるのでしょうか。事の是非はともかく、ジョージア州としては、このテストを受けてそれを進級の判断材料にしていることは事実です。もちろんこういうことを疑問に思うのは、一人外国人の私のみではなく、丁度CATが終わった季節に、新聞にも、幼稚園生という幼ない時期にこういうテストを受けさせてそれを判断材料にしていることの是非について、心理学者が反対の意見を述べてありました。様々な意見がありながらも、一応今の時点では、これを受け入れているのがジョージア州の実状というわけです。

☆授業をしている幼稚園

今述べたような状況のため、この幼稚園も全く一年生と同じように授業をしています。私が初めて見学させて

もらった時は、そういう背景をまだ全く知りませんでしたから、本当にびっくりしてしまいました。私はアメリカに対して、本当に漠然としかイメージを持ち合わせてはいなかったのですが、それにしても幼稚園から授業をしているとは、全く思い至りませんでした。

次女のクラスに入った時は、もう授業がはじまっていた。二十二〜三人を担任の先生とエイド（助手）の先生の二人で受け持っています。それぞれのテーブルでグループになって四〜五人が一グループです。日本のように一斉に黒板を向いて何かをするというのはほとんどありませんでしたが、アルファベットのサウンスを練習する時はクラス中そろってやっていましたし、スライドを見る時（この時は「種の旅」という理科教材でした。）は、隣りのクラスと合同でした。あと国語や算数にあたるものを学習する時は、グループごとに先生が回ったり、グループで先生のところへ動いて行ってやっているようでした。午前中に一度、四十分ぐらいの長いお休み時間―これはスナックタイムと呼ばれていて、家か

ら持ってきたおやつを食べたり、決められた曜日には注文しておけばアイスクリームも食べられる時間なのです。ともかくびつくりすることばかりでしたが、食べ終わると、運動場（といっても原っぱといった方がふさわしい校庭です）で、おいかけっこをしたりして遊んでいました。この日は、私がいたせいか、次女はとても元気で、まだ五日目というのにお友達と動き回っていました。そのあと、また一勉強して、ランチの時間となり、そのあとまた遊んで、幼稚園では、マットに横になってお昼寝の時間がありました。

私は、へえーっ、こんなにしつかり勉強をやらされているのかと本当に驚きました。もっと自由に伸び伸びと遊ばせてくれるとどこかで思い込んでいたのですから、それは一種のショックでした。それに、アメリカンスクールへ行く二日前にはじめて行った日本語学校（これはアトランタの北にあって、この地域の日本人で希望する人のために開かれています土曜日一日だけのアトランタ補習校のことです。）の幼稚部でも、なんと「お勉

強」をしていたので、今迄よく遊ばせてもらえる幼稚園に通っていた次女が、こういう環境で本当にやっていけるのかどうか不安でたまりませんでした。

アメリカン・スクールでは、「廊下を走る子ども」は一人もいません。何故かという教室間の移動はトイレに行くことを除いて、ほとんどライン・アップ、つまり一列に並んで移動するためです。これもまた私にとって、初めての体験で、小学校や幼稚園での休み時間、遊び時間の騒々しさに慣れている私にとっては、とても奇妙に感じられました。この奇妙さは、飼いならされているこちらの犬が、主人の前でとても礼儀正しく従順なのをみてびつくりするのと同じ種類のものでした。ともかく外でも犬が吠えません。私は、こちらの犬はなんとしつけが行き届いているのだらうと感心してしまったのです。六か月経った今の印象はまた違うものを持っているのですが、幼稚園から小学校年齢の子どもの学校での静かさの印象も、また同様のものとなっています。ただ一か所だけ、私が本来のものと思える喧騒が残っていた

のは、ランチルームでした。ここでは本当に騒がしく、まさに、ここに居るのは「子ども」だと思ったものです。

(見学のあとで)

ともかく、かようにして一週間は過ぎ、次女に限ってのことですが、この一週間で、恐れも驚きもすべて出さきってしまったせいか、あとは時が経つにつれて、日本にいた時以上に自由に闊達な子どもにもよみがえっていききました。月曜日から土曜日まで勉強に行っている、日本にいた時より、より自由な印象を彼女から受けるのは、一体何故なのだろうか、というのが今の私の持つ疑問なのです。

今回は全く触れなかった上の二人については、また別なチャンスにお話しさせて頂こうと思っています。彼らは、最初泣けなかった分、背に重荷をしょってしまい、それはみていてつらいとしか言いようのないものでした。

でもとにかく、私達は家族五人でこの地に暮らさなければならぬのです。

人間として触れあえるまでに現地の人とやりとりが出来るまでの道の何と遠いことか……。住んだり、人と触れあえば触れあう程、言葉を持たないもどかしさを感じます。そして言葉を持たないという意味では、ゼロから出発した子ども達のつらさは、多分私達の想像を越えるような体験だと思ふのです。

今、まだ六か月、すべてのことが進行中で、あまり何もまとめて何か言うことが出来ません。この次、又、皆様にメッセージをお送りできる時は何かが見えていることを望みながら、このへんでペンを置かせて頂こうと思います。サンダーストームのち晴れとなることを祈りながら。